

言語情報の誤解に対するメタ認知を促す授業： learning by teaching の活用

三宮真智子*

言語情報の解釈には、誤解がつきものである。誤解はしばしば結果として、相手に対する否定的な感情や困った事態を招くが、私たちが誤解の生起プロセスを意識化することは少ない。そこで、誤解に対するメタ認知を働かせることによって誤解の予防・解消を目指す演習形式の授業を教員養成系の大学院において実施した。本報告では、誤解について下級生に教えるための冊子を作るという活動を取り入れた learning by teaching 型の演習授業を紹介し、こうした演習授業を、小中高の学校段階へも導入することを提案した。

[キーワード：コミュニケーション、誤解、失敗事例分析法、メタ認知、learning by teaching]

1. はじめに

コミュニケーションの行き違いは、トラブルの発生原因になりやすい。大学生においても、対人コミュニケーションがうまくとれないために悩みを抱えることが多い。どちらかと言えば他者と関わることに對して積極的であるはずの教員養成系大学の学生でさえ、自分の考えや気持ちを他者にうまく伝えることができないという問題を自覚している（三宮，2004a）。自分の考えや気持ちをうまく伝えることができない時、また逆に、相手の考えや気持ちをうまく受け止めることができない時には、誤解が生じやすい。さらに、文脈情報をうまく活用できない時にも、誤解が生じやすい（Wardhaugh, 1985）。

誤解には、軽微なものから深刻なものまで幅がある。指示語が指す対象の取り違えといった比較的単純なものから、発話者の背景意図の誤解といった語用論（たとえば、Levinson (1983)）に関わる誤解まで、多様な種類がある（詳しくは、三宮（1987）参照）。

誤解がもとで人間関係が壊れ、中学時代にいじめを受け続けた事例もある。たとえば、筆者の行っている誤解調査において、次のような事例があった。

「中学生の時、部活の顧問の先生が私とある友人Aを呼んで、『来年の部長、副部長はお前たちだから、しっかりやれ』と言ったのを、別の友人Bに『ちゃんとやれるかな』と話したら、BがAに『私』がA

とうまくやれない』と考えているかのように話したため、A主導の大々的ないじめを卒業まで受け続けた。実際におかしいなと思いつつながら、なぜいじめられているのかわからず、卒業時に事実を知り、むなしかった。」

これは、「（「私」は部長を）ちゃんとやれるかな」と言ったつもりが、省略部分を誤解されて「（「私」はAと）ちゃんとやれるかな（うまくやれているかな）」と解釈されてしまい、それがいじめられる原因になった例である。この事例には、次の2点において人間の情報処理特性がみごとに現れている。まず1点目は、聞き手であるBが、「私」とAの関係があまり良好ではなさそうだとの自らの既有知識（言語外情報）に基づいて「私」の発話における省略部分を復元している点である。人間は、言語情報を解釈する際に必ずと言っていいほど、言語外情報を混入させる。言語情報の中でも特に日常会話における発話は、多くの場合省略表現を含み、あいまいであったり多義的であったりするため、その解釈には、聞き手の既有知識が大きな影響を及ぼす。2点目は、記憶の問題である。「私」から話を聞いたBは、自分の記憶に基づきAに報告（告げ口）を行っている。記憶が時間経過とともに原情報を歪めることは周知の事実であるが、特に、推測や疑問を断定に変容させやすい。つまり、記憶には情報を単純化する性質がある。この例では、「ちゃんとやれるかな（疑問）」が「ちゃんとやれない（断定）」のように変容してい

る。「間に人を介すると話がうまく伝わらない」という経験則も、こうしたメカニズムにより裏づけられる。

誤解の予防や解消のためには、誤解の生起プロセスに注意を向け、誤解を引き起こす要因に対してメタ認知を働かせることが必要である。学習におけるメタ認知の重要性は、最近ますます強調されるようになっており(三宮, 2008)、コミュニケーションにおいても同様である。

本報告では、筆者が教員養成系の大学院(鳴門教育大学修士課程)で開講している「思考支援の認知心理学演習」の中で行った、誤解についての演習授業を紹介する。この演習授業では、「誤解について教える」という立場に学習者が立つことにより、言語情報の誤解に対してメタ認知を働かせやすくすることを目的としている。

2. 誤解についての演習授業

2. 1 演習の手続き

「思考支援の認知心理学演習」は、前期に開講している「思考支援の認知心理学研究」で取り上げた内容の理解を、受講者の関心に応じてさらに深めることを趣旨とする。特に、人間の一般的な思考特性、思考にかかるバイアスなどについての理解をもとに、日常的問題解決力の向上を図ることをねらいとする。この中で、言語情報すなわち言葉の誤解がどのような形で、なぜ生じるのか、それを防ぐにはどうすればよいのかについて、90分授業7回分を使って演習を行った(表1)。

表1 誤解についての演習授業の内訳

第1回	誤解についての認知心理学的解説とトラブルに発展した誤解事例の紹介
第2回	各班で誤解事例を収集
第3回	各班の誤解事例を集めたプリントを配布し、全員で検討
第4回	各班で、学部新入生を対象とした「誤解を予防するための配付教材」を作成
第5回	各班で教材資料作成を続行
第6回	各班で教材資料作成を続行
第7回	各班の作成資料を配布し、全員で検討

初回の「誤解についての認知心理学的解説とトラブルに発展した誤解事例の紹介」においては、誤解事例のふり返りはコミュニケーションに対するメタ認知を行うことである点を強調した。また、資料1を配布・解説し、ネガティブな感情を引き起こす誤解について、次のメタ認知的観点から整理した:

○人間一般の認知特性(どのようなバイアス傾向があるのか)

○状況特性(どのような時に解釈にバイアスがかかりやすいのか)

これに加えて、いじめ等のトラブルに発展した誤解事例を紹介した。思い込み(スキーマ)、感情、文脈などが言葉の解釈に影響することを知り、自分の解釈を見直すことや相手の解釈を予測すること、すなわちコミュニケーションに対してメタ認知を働かせることの重要性を説明した。また、最後の7回目では、他の班の誤解教材に対して質問・意見を出し合い、各自の班の作成教材の改善すべき点を考えた。

2. 2 演習の受講者

誤解の演習を行う時点での受講者は修士課程1年生11名、2年生2名の計13名であった。彼らは3つのグループ(それぞれ、4名、4名、5名から構成される)に分かれて活動した。

2. 3 グループワーク

2. 3. 1 グループで収集した誤解事例

各班によって収集された誤解事例には、たとえば次のようなものがあつた。

- ・もう会うつもりはないが、社交辞令で「ほな、またね」と言ったところ、相手はまた誘ってくれると思いき期待した。
- ・「帰ろうか」と言うタイミングによって、「時間が遅いから」ではなく「楽しくないから」と受け取られることがある。
- ・昼ご飯に誘ったとき、「今から用事があるから」と断られた。本当に用事があつたのか?(行きたくないから断つたのか)と思った。
- ・「かわいい」というほめ言葉で、馬鹿にされていると感じた。
- ・「あれ、取って」と言われて、違うものを取つた。
- ・「あの人」のうわさ話をしていたところ、違う人の

ことで話が続いた。

- ・緊迫した雰囲気の中へ気分を変えようと、明るく「おはよう！」と入っていったところ、空気の読めない奴だと誤解された。
- ・「どちらへ？」という単なる挨拶に対して、具体的に行き先を答えた。
- ・「つまらないものですが…」という謙遜が、日本語を解する外国人には本当につまらないものとして伝わった。
- ・徳島の方言で「せこい」は、しんどい・体調が悪いという意味だが、他県の人には「けち」＝「せこい」などの意味で受け取られて、気まずい雰囲気になった。
- ・早くしなさいという意味で「はよ、しねーよ」（岡山方言）と言ったところ、「はよ、死ね」と言ったのかととられて、けんかになった。
- ・パソコン室で「暑いね」といったら、周りの人に「窓開けましょうか」と気をまわされて、気まずい思いをした。本当に暑いというつもりではなく、友人に相槌を求めただけなのに……。
- ・面接の練習で「人が嫌がることを進んでやりたいです」と言うと、面接官に「それは誤解されやすい」と言われた。人の嫌がることってというのは、してほしくないことと捉えられてしまう。この場合、具体的な事例を挙げるほうが誤解されにくい。

こうした誤解事例を全員で検討し、誤解の分析（コミュニケーションの失敗事例分析）を行った後、各グループで、学部新入生を対象として「誤解を予防するための配付教材」を作成した。

2. 3. 2 グループで作成した教材例

作成された教材資料からの抜粋を資料2、資料3、資料4に示す。

2. 3. 3 受講者の感想

誤解の演習についての受講者の感想には、以下のようなものがあった。

・「日常生活の中の誤解」に関するパンフレット作りが非常に楽しかったです。自分の生活を見直してみると、けっこう誤解を受けたり誤解をしたりしていることが多いなあということもわかり、誤解を避け

るためにどういうことに気をつければいいのかということが、新入生向けのパンフレットづくりを通して自分自身気をつけることが確認できた感じです。頭ではわかっているつもりでも、言葉にしたり、文字にしたりしてみると、不十分なところが見えてくるので、いいですね。

・誤解を生む会話の冊子を制作するにあたり、誤解がいくつかの種類に分類することが出来、また、少しの工夫や配慮によりその誤解を回避することができることがわかり、今までの言動を考えさせられた授業内容でした。この内容を生かし、軽はずみな言葉を慎もうと思わされました。また、冊子を班ごとに制作し、それぞれの班の工夫が見られ、配布物により人に何かを伝える際に、どのように工夫し、文章や絵などを配置すればいいのか、書けばいいのかを学ぶことができました。

・ふだん日常生活においてあまり深く考えることがなかったので、よい経験となりました。作品が仕上がるまでのプロセスが、私の中では大変素晴らしかったと思います。グループで話し合った後に、他のグループの前で披露することで、自分たちの考えを少しでも人に伝わりやすくしたり、相手の良いところを見たりと、作品完成までにどんどん良くなっていきました。各グループともに、それぞれの特徴が現れていて、発表もおもしろく聞けました。

3. learning by teaching で誤解に対するメタ認知を促す

ささいな誤解が、人間関係にいかにも悪影響を及ぼす場合があるかを下級生（大学新入生）に教えるという課題を通して、どのような誤解がどのような場合に起こるのかをメタ認知的にモニターし、どうすれば誤解を予防し解消することができるのかを考える（メタ認知的コントロールを行う）ことが促進される。つまり、メタ認知が促され、受講者自身の学びが深まることが期待できる。相手が下級生であるため、教える側には責任が生じる。他者に責任を持って教えるという課題に取り組むことによって、learning by teaching（教えることによって学ぶ）が成立しやすくなると考えられる。

こうした演習は、高校や中学校、小学校高学年に

においても可能である。子どもたちにも、その年齢、発達段階なりの誤解経験があるはずである。特に友人とのコミュニケーションがうまくいかず、人間関係の悩みを抱える子どもたちは少なくない(三宮, 2004b)。Gardner (1999) の言う対人的知能を高めるためにも、誤解への対処法を身につけておくことが必要である。日頃、自発的にふり返ることの少ない誤解現象を意識化し、言語化することによって、誤解されやすい言語表現や誤解が生じやすい状況・人間関係への気づきが生まれる。この気づきをもとに、誤解の予防や解消の方法を考えることが可能になる。言語情報の誤解というコミュニケーションの失敗から得た教訓を他者と共有しようとする時、コミュニケーションについてのメタ認知的知識は広がり、また、より確かなものとなるだろう。その際、本授業で試みた失敗事例分析法 (Failure Analysis Method: FAM) の活用が1つの有効な手段になると考えられる。

4. まとめ

日常会話で交わされる言語情報の解釈において、誤解は避けられない。誤解はしばしば、相手に対する否定的な感情や困った結果を生むが、私たちは多くの場合、誤解の生起プロセスを意識化することはない。そこで、誤解に対するメタ認知を働かせることによって誤解の予防・解消を目指す演習形式の授業を教員養成系の大学院において実施した。本報告では、誤解について下級生に教えるための冊子を作るという活動を取り入れた learning by teaching 型の演習授業を紹介した。受講者の感想からも、誤解に関する講義のみを行うよりも、自らの誤解経験をふり返り、これを受講者どうしで共有し、さらに下級生を対象として、グループで誤解予防の配付資料を作成するという活動を行うことにより、誤解に対するメタ認知が深まったことが示唆された。最後に、誤解についてのこうした演習授業を、小中高の学校段階へも導入することを提案した。

引用文献

Gardner, H. (1999) *Intelligence Reframed:*

- Multiple Intelligence for the 21st Century*. New York: Simon & Schuster. 松村暢隆 (訳) 2001 MI: 個性を生かす多重知能の理論 新曜社
- Levinson, S. T. (1983) *Pragmatics*. New York: Cambridge University Press.
- 三宮真智子 (1987) 人間関係の中の誤解: 言語表現の誤解に関する基礎調査 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 2, 31-45.
- 三宮真智子 (2004a) 思考・感情を表現するコミュニケーション教育の提案: メタ認知の観点から 鳴門教育大学学校教育実践センター紀要, 19, 151-161.
- 三宮真智子 (2004b) 子どものコミュニケーションを考える: 現状と課題 児童心理7月号, 金子書房, 874-879.
- 三宮真智子 (2008 印刷中) 「メタ認知: 学習力を高める高次認知機能」 北大路書房
- Wardhaugh, R. (1985) *How conversation works*. Oxford: Blackwel.

謝辞

本稿でレポートの一部を引用させていただいた「思考支援の認知心理学演習」の受講者の皆さんに感謝します。なお、本研究の一部は、科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号: 18500711, 代表者: 三宮真智子) の助成を受けて実施された。

注

各班の作成教材 (抜粋) を掲載するにあたり、以下の変更を筆者の責任において行った。

- ① アイドルタレントの実名を伏せた。
- ② アイドルタレントの写真を削除した。
- ③ 市販ソフト等から借用していた当初のイラストをすべて、島田学氏 (鳴門教育大学大学院) の協力により、同氏のオリジナルイラストに差し替えた。
- ④ ①~③の変更に伴い、教材のレイアウト等の一部を変更した。
- ⑤ 意味のわかりにくい表現を若干修正した。

資料1 「日常生活の中の誤解」についての解説（三宮（1987）をもとに作成）

人は誰でも、他者に自分の気持ちや考えをわかってほしいと願うものです。しかし、その願いは、常に叶えられるわけではありません。むしろ、誤解されることの方が多いのかもしれません。それは、コミュニケーションをとる相手には、その人独自のものの見方や考え方、言葉に対する意味体系があり、同じ言葉を聞いても、そこから連想すること、感じるあなたがあなたとは異なる場合が多いからです。また、私たちには、その時たまたま考えていること、気にしていること、関心を持っていることに引き寄せて、相手の言葉を解釈してしまう傾向があるからなのです。このような人間一般の認知特性をよく理解しておくことが、他者と円滑なコミュニケーションをとるために役立ちます。

また、誤解には種類があります。具体例を見ながら、考えてみましょう。

例1) ある点に気がついたので、「あ！ほうかあ」（「あ！そうか」の意）と言った。すると、まわりで考えていた者が、「どうせあほや、悪かったなあ」と言った。

例2) 「食べていいよ」と言われ、テーブルの上を見ると食べ物がのっていたので、それを食べた。しかし食べてよいのはテーブルの上のものではなく、実は別のものだった。

例3) 「ナスにはあまり味がない」、そんなことを話題にしていたら、そのうちのひとりは、「知人の那須（なす）というヤツに個性がない」という内容のつもりで、5分以上も話につき合っていた。

例4) 約束をしていた相手に用事ができて会えなかったとき、メールで「うそつき」みたいに返事したら、「大事な用事なんだから仕方がないだろう」と本気で怒られた。冗談のつもりだったが、伝わっていなかった。

（中略）

ここで、皆さんに注意していただきたいのは、特に、例4のような語用論的誤解（発話意図に関する誤解）です。と言うのも、悪くすると人間関係にひびを入れかねないものだからです。単なる聞き違いのような、笑って済ませられる誤解ならいいのですが、意図がうまく伝わらず悪意に解釈されてしまいかねない語用論的誤解には、くれぐれも気をつけましょう。

例1

岡山出身のI君が広島大学に入学して野球部に入りました。野球部一年生で野球の道具の片づけをしている時に、作業が遅れていたK君（広島出身）にI君が声をかけました。その時の会話。

I君 「やっと練習終わった～、はよ～片づけてゆっくりしよ。」
 K君 「ほんまじゃな。はよ～片づけて帰ろう。」
 I君 「じゃあ、皆で一斉に片付けようや。」
 K君 「そうじゃな。頑張ろうや。」



みんな一斉に片づけ始めました。しかしK君は片づける作業が皆よりも遅い。けれどK君なりに一生懸命片づけています。そこでI君の一言。



I君 「K～、はよ～しね～や！」
 K君 「は～？ワレ何言いよるんじゃ！」
 I君 「え？なんで怒っとん？」
 K君 「ワレが死ね！言うけ～じゃろうがっ！」
 I君 「いやいや、違うけ～、話聞いて～や・・・。」
 K君 「ワレの話なんか聞きとうもないわ。たいぎ～のお。」

<なぜ、誤解が生じたのか？>

☆この問題でのポイントは2つあります。

1つ目は「方言」です。I君が岡山県出身であるのに対して、K君は広島県です。岡山県では「はよ～しね～や」＝「早くしなさい」という意味でよく使われます。しかしどこの県に行ったとしても「はよ～しね～や」と言われて理解できるわけがなく、「早く死んでください」と捉えてしまいます。

2つ目は、「目的語が抜けていると会話が成り立たない」ということです。この例の場合、もしもI君が、「K～、(片づけを) はよ～しね～や！」と言っていたらどうでしょう。K君はI君が言った言葉を「死ね」とは捉えずに、「片づけを早くしなさい」と捉えていたのではないのでしょうか。こうした、何気ない言葉にも誤解は生まれるものなのです。

<要点>

- ①目的語をちゃんと相手に伝える。
- ②伝わる言葉と伝わらない言葉があることを理解する。
- ③言葉は、選んで使う。

例2

大学に入学して、しばらく経ったある日。友達になったA子さんとB子さんの会話。

A子「B子って誰かに似てるとおもったら、アイドルの〇〇みたい。」
 B子「えっ。私って〇〇みたいにバカっぽく見えるの？（怒）」
 A子「いやっ。そういう意味じゃないよ。」
 B子「じゃあ。どういう意味??悩みとかなさそうだとか？（怒）」
 A子「えっ・・・ほらっ、か、顔とかが似てるんだよ。ほらっ。目とかくりっしてるとこ



とかそっくり。うらやましいなあ〜」
 B子「ふ〜ん。まあよくいわれるんだよね。だけど、あんまり私、〇〇好きじゃないし。
 あんまりいわれたくない。」
 A子「ごめん・・・」

<なぜ、誤解が生じたのか？>

十人十色ということわざがあるように、人の感性も人それぞれです。今回の例のように自分がかわいいと思いき、誉めるつもりで言ったとしても相手の嫌いな人であった場合、相手にとってはその言葉はけなされたように聞こえてしまいます。

他にも、男の人に対して「かわいい」ということを言うと不愉快に感じる人もいます。

<要点>

- ① 思ったことを軽々しく口にしない。
- ② 相手の立場に立って言葉を選ぶ。
- ③ 補足説明を入れる。 例「〇〇に似て目が大きくてかわいい」

資料3 2班の作成教材より抜粋

友達関係編

マナブとノブキは2人でフジグランに映画「HERO」を観に行った。映画を見終わった後で歩きながら マナブが「つまらなあ」と映画の感想を言ったら、ノブキは自分と遊びに行ったことがつまらないと勘違いし、マナブに対して「つまらないなら最初から誘うな」と怒り出し、帰ってしまった。

★言葉足らずが生んだ誤解・・・

これはマナブの言葉足らずが生んだ誤解といえます。いくら仲の良い友達とはいえ言葉足らずで伝わる場合と、伝わらない場合がありますので、いらない誤解は避けて仲の良い友達とは良い関係を築いていきたいものですね。



先輩後輩関係編

バドミントンの大会が終わって、マスミと千トセは二人で食事に行った。二年先輩のマスミは少し先輩ぶって、千トセに「何でも好きなものを注文していいよ、私が奢るからね」と言った。千トセはマスミの言葉をまに受けてランチとケーキセット(計2000円)を頼んだ。先にランチ(1100円)しか頼んでいないマスミは心なしか口数が少なくなった。店を出るとき「ごちそうさまでした〜♪」と嬉しそうに言った千トセに対しマスミは目を合わせなかった。

★先輩の言葉をまに受けたための誤解

いくら先輩が「好きなものを注文していいよ」と言ってくれても、そこは奢って



もらう立場です。この場合先輩の注文した料理の金額を考慮しながら自分の食べたい料理を注文しましょう。例文から考えると、これ以降マズミさんは千トセさんに対して気軽に奢ってあげようとはあまり思わなくなるでしょう。

マナブはテツヒコ先輩の家に遊びに来るように誘われた。テツヒコ先輩は電話でマナブに「気がつかなくて良いから、手ぶらで来いよ」と伝えてた、しかしマナブは一瞬迷い、なけなしのお金でお菓子の手土産を買い、テツヒコ先輩の家に向かった。

★先輩の気配りに対し、後輩が気を使いすぎた為生まれた誤解

これは、よくある誤解ですね。先輩は後輩に気を使わずに気軽に家に来てほしい為に発する口癖みたいなものです。せっかく先輩が「手ぶらで来いよ」と言ってくれているのですから、後輩のマナブは何も持っていかなくても怒られたりはしないでしょう。先輩に対して失礼だと思う人は、そうですね、3回に1回くらいお菓子を持って伺ってはどうか。

資料4 3班の作成教材より抜粋



◎何でも好きなものを選べよ、と言っておごってもらえる場合

コンビニにて・・・

先輩「何でも好きなものを買っていいぞ。」

後輩（自分）「じゃあ・・・これでいいです。」

先輩「本当にそれでいいのか？」

心の中・・・これでいい??これがいいんじゃないのか??妥協をしているんじゃないのかな。もっと素直に欲しいものを選んだらいいのに。

後輩「はい、それでいいです。」

心の中・・・本当は、これがいいと言いたんだけど、図々しく思われるのが嫌なので言えないまでもこれが欲しいんだ、妥協しているわけではない。

お互いの気遣いによって生じた誤解である。

この場合において、お互いが嫌にならないためにも、なるべく自分の意見を鮮明に述べること。後輩も適度に遠慮することが肝要であるといえる。

☆気遣いが言葉の解釈に影響する。

◎方言による勘違い

大学には様々な県から人が集まる。ここでは方言によって生じる誤解について試してみる。

A「(体調が悪そうなB君に) おい、B君せこいん？」

B「は？」

A「せこいんちゃうん？」

B「せこーないわ！」

「せこい」は、徳島の方言で意味はしんどい・体調が悪いということだが、他県の人には「けち」=「せこい」などの意味で受け取られて、気まずい雰囲気になった。



他県の友達との会話にて（バイトが同じ）
（体調がすぐれない）A「今日、バイト代わってくれんの？」
私「え？その言い方？」

代わってくれることが、当たり前のように聞こえた私は、気分を悪くした。しかし、これは香川特有の言い回しのようで、本来気持ちがかもっているとのこと。別に上から目線で見ている訳ではなく、心から頼んでいたことを後から知って、後悔した。

相手の気持ちや表情をきちんと考えて行動すれば、失敗は減ると思われる。方言による誤解はまだ他にも多くある。

☆言葉の捉え方が解釈に影響する。

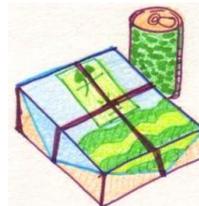
◎弁当を注文する際

ソフトボール大会にて電話でお弁当の注文をする際・・・

私「一人1000円で30個できますか。」

弁当屋「はい、できますよ。」

そして当日、弁当が届くと消費税込みで31500円請求された。



自分の考えでは、「一人千円」という時点でっきり消費税込みの値段だと思い込んでいて、店員にはそれがなかったことで生じた勘違いである。このような場面に遭遇しないよう、注文する際には事前に確認しておくことをお勧めする。

☆思い込みが言葉の解釈に影響する。